

ドイツ・フランス国際教科書対話

二カ国間で教科書を共同で作る場合、これほど苦勞しなければならないということを知った。個々の歴史家の力だけでなく政治の力が必要であること。ドイツの場合は、州によって教科書が独自に制定できるために、フランスと合わせて17の学習指導要領への対応が必要であったこと。両国の歴史の理解が異なり、外交上の問題もあるために、お互いの意見を尊重しながらも、両国の歴史家たちは自分の意見をなるべく通したいという葛藤があること。言語上の問題があり、同じようには相互に訳せないこと。このようにして並べてみると苦勞のほうが多いように見えるが、思ったよりうまくいった点などはないのか気になった。

また、「私たちは歴史を『私たち』だけのために都合よく使うのではなく、『隣人』と協力するために使うこともできる」というのが面白かった。ドイツとフランスの場合はこの認識を信じて国際教科書対話を行ったのだと思うが、結局、結果としてはこれがうまくいったのだろうか。話を聞いた範囲だけでいうと、私は上辺だけドイツとフランスが協力しているように聞こえた。しかし、実際に上辺だけであったとしても、「二国間の溝を深めたい」だとか、「外交を発展させたい」といった気持ちを表す手段としてはとてもいいと思った。

私の個人的主観ではあるが、この二国は「喧嘩中の恋人同士」のようだ。歴史は、恋愛ほどふわふわしたものでなく、時には多数の人の命や感情が関わってくるものであるから、このような例は適切ではないかもしれない。しかし、二国間の微妙な心情の動きや対応は、2人の人間、特に繊細な対応が必要な恋人同士における関係性と似ているのではないか。お互いの意見を尊重しながらも、自分の意見は言いたい。言葉の食い違い、誤解、お互いの将来観の違い、お互いの経験の違い……。少しのニュアンスの違いの重なりが大きな誤解につながり、やがて溝が生まれる。その生まれた溝をお互いに埋めたくて、苦しみながらも努力を重ねる。理解の仕方、言葉に戸惑う……。溝ができてしまったとき、「仲直りしたい」、「お互いをもっと知りたい」という、その気持ちを伝えないことには何も始まらない。その状態が、ドイツ・フランス間の話し合いから見てとれるように思えた。「ドイツの歴史家に言わせると、フランスの歴史家は……」云々。歴史の対話の繊細でデリケートな部分が特に感じ取れた。

我が国日本も、韓国と共同で歴史を話し合っているそうである。第一弾よりグレードアップして第二弾まで進んでいるそう。韓国からは、日本の考え方がどのように映るのだろう。逆に、日本の歴史家は韓国をどのように見ているのだろう。二国間のその後の関係性は？そのあたりが私の気になりどころである。